渡辺　博史（わたなべ　ひろし）

客員教授
専門分野／国際金融環境

東京大学法学部学士（公法コース）、米国ブラウン大学経済学系大学院修士（数理経済、財政学専攻）
財務省（旧大蔵省）で、国債管理(中期国債の新規発行、１０年債の月次発行)、税制（利子課税制度の変更、消費税の導入)、人事管理、国際金融（通貨制度、海外支援、）などを担当し、財務官で退官。その後、Harvard University Senior Fellow, 一橋大学大学院商学研究科教授などで国際金融環境論を講義した後、国際協力銀行最高経営責任者として日本企業の海外展開の支援、アジア諸国の金融補完を行い、また国際通貨研究所理事長として通貨研究、資金移動の分析などを行ってきました。この他、ミステリ評論、風刺画を使った時事解説も行っています。

著書：『新利子課税制度詳解』、『消費税ガイドブック』、『ビジネスマンのための東欧情報』、『NEW ヨーロッパを読む』、『教育改革の改革』、『最新アメリカ金融入門（訳書)』、『ミステリで知る世界 120 か国』、『ミステリで知る全米 50 州』など

国際金融は実は身近な話です

「お金」がどこからどこへどのように流れているか？　豊かな国と貧しい国の間、一つの国の中での富裕層と普通の人たちの間、年配の世代と若い世代の間、個々人のポケットとまとめて運用する大ファンドとの間などに見られる二つの極の間で動く資金の流れの姿や量は時代によって変わっていきます。また豊かな国と貧しい国の間の資金移転も、贈与の形で行われるのか、借款という形で行われるのかで全く異なる影響をそれぞれに及ぼします。更に、この「お金」の動きが民間中心で行われる場合と国といった公的部門を介して行われる場合とでも、与える影響は大きく変わってきます。

極端な例では、豊かな国の普通の人たちからの貧しい国への支援金がそこの富裕な人たちに流れるといった動きは公平、公正という観点からは全く異なる様相を見せますし、世界最大の国内総生産を誇るアメリカは資金不足、貯蓄不足なので世界中から資金を吸収しています。これらが何故そうなるのだろうか、それで良いのだろうかということを考えることは社会の構造、経済の仕組みを理解することに役立ちます。

また、モノ、カネ、ヒト、情報の四種の要素が全く制約無く自由に国境を越えて動いていくグローバライゼーションには、近時やや制限がかかり、更にアメリカが他国に負担を押し付ける形で実行した関税引き上げ策は、モノだけでなく、全ての要素の移動を拘束しています。モノの世界を見ると、これまでは最も安価に最も良いモノを作ることができる「最適地」で集中的に生産することで、世界中の人が受益していたわけですが、この関税政策の適用下においては、価格、品質双方の面で次善でしかないモノで我慢せざるを得ない時期になってきています。そういう意味も含めて、諸外国との交流、交易が不可欠になっている現代では、他国の動きが自国の中の生活にも大きく影響を与えています。カネはモノの動きの反対方向に動くことが多いですから、モノの動きの変化は当然にカネの動きにも変化が出ます。

このような時代においては、「通貨の価値を守る」という政府や中央銀行の責務は、将来も同じ通貨で同じ量の物が入手できるためにインフレを防ぐということだけでなく、他の国に行っても同じ量の物が購入できるために為替水準の低落を防ぐということにも及ぶはずです。

「お金」、カネにも価格が付きます。これを利回りと呼ぶことが多いですが、これが金利、配当といった様々な形で提供されます。その違いが生じる理由の一つはリスクの有無です。生産、建築などのプロジェクトを進めるときにも、リスクをどうとらえるかが最大の課題になりますが、「お金」をどこに投資するかにあたっても同じことが起こります。また、当面使わない資金の投資が利得をもたらすのとまったく同じ理由で借金にも利払いをしなければなりません。国内あるいは外国の市場動向、金利政策によって起こる金利の変動が、これらの利得、支払い双方の金額を変動させることになります。

こういったことの全体を考える場として「国際金融環境」という分野を研究しています。

メッセージ

広い視野で資金の流れを見ることによって、経済、社会が現在抱えている問題がより明らかになるとともに、弥縫策ではない本格的かつ抜本的な改革の方向も見えて来ると思います。自分が関心を持つ分野を深めるとともに異なった分野と結びつけることが出来ないかとレーダーの可視範囲を広げることで、全く新しい世界に入って行くことが出来ると思います。国際金融環境の変化や動向、金融商品への課税のあり方などを、理論を通じてみるだけではなく、謎解きの心と関心、あるいは物事を異なる角度から冷徹に観られる姿勢などを持って考えられるお手伝いをしたいと思います。（研究室 1403 号室への来訪を歓迎します。）